

0：「西欧中世比較史料論研究」の趣旨と活動目標

0：はじめに

本報告書は、平成17年度より3カ年の予定で、科学研究費補助金の助成を受けて活動中の共同研究について、平成17年度の研究成果の一部をまとめたものである。

ここでは、共同研究の趣旨と活動目標を提示する。あわせて、その活動母胎である「西欧中世史料論研究会」を紹介したい。

1：研究の趣旨

伝統的に史料学研究において中心的役割を果たしてきた西欧中世史領域から、近年の史料論研究の動向を整理・分析し、その成果を「史料論の現状と展望」としてまとめ、歴史学界全体を視野に入れた問題提起を行う。この際、西欧の他の時代、とりわけ近世史や、日本・東洋史等の研究者との協力関係を深めることにより、比較史的観点による諸問題の検討を重視する。最終的には、この成果を念頭においた、個別実証研究を企図している。

近年、歴史学の存在基盤を揺るがす批判が多方面から行われているが、実証的歴史学の立場から、このような動向を批判的に摂取し、対峙するためのもっとも有効な手段として、史料論に関わる問題関心がある。史料は現実との関係では何を語っているのか（史料の生成）、我々がそれを知ることが出来るのはなぜなのか（史料の伝来）、そもそも現実を「史料」として認識する歴史家の作業とは何か（歴史家の史料認識論）、などの問いかけがそれである。他方で、古文書学をはじめとする史料学（歴史補助学）とも一定の関連を有するとはいえ、史料論と呼びなわされている動向は、けっしてそれ自体が抽象的に追究されるものではない。あくまで具体的な実証研究の深化・洗練として現われる問題関心や方法論の集合体であり、史料情報の認識という、歴史学研究の実践の場で生かされてこそ、その効果を最大限に発揮する。

西欧中世史の領域では、少なくとも70年代にはすでにこの方面での問題関心の刷新への動きがかいまみられていた。90年代初めに刊行されたフランス中世史学界動向でも、過去20年にもっともめざましい革新を遂げた三つの領域の一つに数え上げられているほどである。他方、日本史領域での史料論研究の活発化は、おおよそ90年代にその端緒についたが、中近世史研究における史料概念の柔軟化からはじまったこの動向は、現在では、あらゆる時代に広がり、問題関心においても対象においても、拡大の一步をたどっている。この意味で、21世紀の初頭に位置する現在という地点は、研究動向を俯瞰して論点を整理するためには、有利な場所にあると考えることができる。

2：研究の経緯と紹介

本研究は、平成14年度に組織された「西欧中世史料論研究会」における共同研究を母胎として、それを発展させるものである。この研究会は、さら

にさかのぼれば、森本芳樹九州大学経済学部教授（のち、久留米大学教授）の主宰のもと、活発に活動した「西欧中世社会経済・史料論研究会」をその源としている。

「西欧中世史料論研究会」は、西欧学界の網羅的かつ体系的な動向追跡と、参加者の個別研究報告を軸として活動を続けてきた。すでに15回におよぶ研究会・シンポジウムを開催しており、この間、個別研究報告のほか、欧米で組織された研究集会録の共同検討会等を積み重ねている。今回の研究補助金の助成を受けて、本研究会は、あらたに組織を再編し、具体的な研究目標を掲げて共同研究に取り組むこととした。

他方、共同研究のメンバーの何人かは、関心を同じくする他の共同研究にも参画しており、これらのプロジェクトと協力・連携関係を維持しながら、本研究に携わっている。とりわけ重要なものとしては、以下のものが挙げられる。

1) 21世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」

研究代表者は、2003/4年度にかけて、九州大学大学院人文科学研究科を実施母体の一つとする、同プログラムの第3ユニット「比較史料論部会」のメンバーとして、「史料論」関連研究会・シンポジウムの企画・実施や、「史料論」に関する理論的側面の検討、およびCOE研究活動への提言などの活動を展開した。また、本研究参加者の数人が、実施母体の構成員として、あるいは研究協力者として、このプログラムに参加した。

2) 21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」

研究代表者は、名古屋大学大学院人文科学研究科を実施母体とする、同プログラムの活動に協力している。同プログラムは、史料論研究と密接不可分の関係にあり、責任者の佐藤彰一教授は、前掲の「西欧中世社会経済・史料論研究会」のメンバーでもあった。2004年9月16-17日に開催された「歴史テキストの生成」と題する国際シンポジウムでは、研究代表者および分担者の一人が、報告者として参加した。

3) 科学研究費補助金（基盤A）「歴史的アーカイブズの多国間比較に関する研究」

研究代表者は、当該研究の代表者である国文学研究資料館の渡辺浩一助教授とともに、研究の理論的基盤づくりや、研究全体を比較史的観点から考察する役割を担っている。この共同研究は、日本史を中心として、中国史、イスラム史、朝鮮史、西洋史研究者を糾合する本格的な比較史料論共同研究である。海外の研究者の協力のもと、2004年度のソウルを初めてとして、毎年順次、世界の各地でシンポジウムを開催する予定である。2007年6月にはパリにおけるシンポジウム（国立古文書学校との共催）が予定されているが、研究代表者は、その準備責任者を務めている。

3：研究目標

本研究では、他領域での多様な動向を念頭におきながら、同じく近年多産な成果が蓄積されつつある西欧中世史領域に関して本格的に研究動向を追跡し、理論および具体的作業の両面での諸問題を検討する。このため、関心

を同じくする研究者を広く糾合するが、核となる研究者である、フランス、イタリア、イングランド、スペイン史研究者による定期的・集中的な研究会を行うほか、比較史的観点を重視して、日本あるいは欧米から関連研究者を招聘する研究会・シンポジウム等を開催する。検討の成果は、報告書およびデータベースとしてまとめ、順次公表する。

具体的な活動目標は、以下のとおりである。

第一の研究会活動については、専攻する時代や地域を異にする研究者を交えたシンポジウム、西欧中世史に対象を絞った個別研究報告会、さらには、欧米の研究者を招聘しての研究会の三種を、バランスを考慮しながら、定期的で開催する。

第二の研究動向の検討と公表については、文献目録の作成と個別文献の内容検討の作業を進めるとともに、重要な研究集会録や論文集の共同検討会、さらにはテーマを絞った動向紹介報告を主眼とする研究会を開催する。

最後に、公表については、研究会活動等は、毎年年次報告書を作成して、成果を迅速に報告する。研究動向の検討については、関係の動向論文を執筆するほか、助成の最終年度に、検討結果と文献目録等を印刷冊子のかたちで公表するとともに、専用ホームページを開設して、逐次情報を開示する。

4：平成17年度の活動と本報告書

平成17年度は、関係文献の調査・収集につとめるとともに、都合12回にわたる研究会活動を実施した。研究会の詳細は、付録のとおりであるが、それぞれは、以下のように位置づけられる。

- 1) 専攻する時代や地域を異にする研究者を交えたシンポジウム
 - －第17回。シンポジウム「史料論のいま」
 - －第23, 26回。研究会「トック教授連続講演会」「アーカイヴズ」
- 2) 西欧中世史に対象を絞った研究会
 - －第18回。シンポジウム「西欧中世史料論研究の具体的課題」
 - －第19回。研究会「修道院カルチュレール史料論」
 - －第22回。研究会「考古学と歴史学」
 - －第24, 25回。研究会「トック教授連続講演会」「私文書」
 - －第27回。研究会「説教史料論の現在」
- 3) 研究動向共同検討会
 - －第20回。「国際ラテン古書体学会研究会」集会録検討会
 - －第21回。「西欧中世史料論研究と日本学界」検討会
 - －第28回。「世界の史料論関係ホームページ」検討会

このうち、本報告書では、編集の時期の関係で掲載できなかつた、第28回「説教史料論」研究会をのぞいて、実施されたすべての研究報告要旨、および本書のために新たに書きおこされたコメントを掲載した。トック教授の二本の講演については、内容の重要性に鑑み、講演原稿を全訳掲載している。

研究会で行なわれた研究報告は、どれも精鋭な問題関心と作業の精緻さの両面で個別論文としての価値を有するものであり、それぞれがしかるべき場所にて、順次刊行される予定である。この報告書は、各業績の速報であるとともに、各特集へのコメントをあらたに掲載することで、いわば学問の立ち上がる場についてのドキュメントという性格も有している。その成果と価値については、読者諸兄弟のご意見、ご批判を待ちたい。

(岡崎敦)

参考資料

西欧中世史料論研究会履歴（場所の記載がないものは、九大文学部西洋史学研究室）

第1回

2002年6月9日（日）

HEIDECKER, K., ed., *Charters and the Use of the Written Word in Medieval Society*, Turnhout, 2000. 検討会

第2回

2002年9月7日（土）

ZIMMERMANN, M., éd., *Auctor et Auctoritas. Invention et conformisme dans l'écriture médiévale. Actes du colloque de Saint-Quentin-en-Yvelines (14-16 juin 1999)*, Paris, 2001. 検討会

第3回

2002年11月24日（日）

梅津教孝「カロリング期の聖者伝

—『聖ボニファティウス伝』を中心に—

宮崎慶一「中世後期異端審問の刑罰

—南仏トゥールーズ地域の住民の対応—

岡崎敦 「12世紀パリ司教区における教会訴訟外裁治権」

第4回

2003年1月11日（土）

情報交換会

第5回

2003年7月6日(日)

KOSTO, A. J. and A. WINROTH, ed., *Charters, Cartularies, and Archives: The Preservation and Transmission of Documents in the Medieval West. Proceedings of a Colloquium of the Commission Internationale de Diplomatique (Princeton and New York, 16-18 September 1999)*, Toronto, 2002. 検討会

第6回(COE第3ユニット第2部会「比較史料論」との共催)

2003年9月20日(土)

シンポジウム「中国・日本および西欧の君主文書の比較研究(12世紀以前)
—文書様式と文書行政—

岡崎敦 「12世紀以前の君主文書の比較研究
—問題関心と方法論の変容—」

梅津教孝 「カロリング王文書の〈かたち〉と〈ことば〉
—西欧中世の文書行政—」

坂上康俊 「詔勅のかたち —古代日本・中国における君主と文書—」

第7回(COE第3ユニット第2部会「比較史料論」との共催)

2003年10月23日(木)

藤本太美子 「11-13世紀ラ・トリニテ修道院海浜所領ウイストラムをめぐる諸史料」

第8回

2003年11月29日(土)

古城真由美 「15世紀イングランドにおけるジェントルウーマンの人的ネットワーク —マーガレット・パストンの事例から—」

Les actes comme expression du pouvoir au Haut Moyen Age, Actes de la Table Ronde de Nancy (ARTEM), 1999, Turnhout, 2003. 検討会

第9回

2004年2月28日(土)

九大六本松キャンパス第一会議室

シンポジウム「文書史料管理の東と西」

岡崎敦 「文書史料管理と文書館 —問題の所在と論点呈示—」

丹下栄 「西欧中世初期研究における「オリジナル」の意義」

内山一幸 「日本における文書の伝来と保管」

林素味 「台湾における文書館と文書管理について」

第10回

2004年4月24日(土)

La conservation des manuscrits et des archives au Moyen Age, Actes du XIe Colloque du comitt international de pal éographie latine, Bruxelles, Bibiliothèque royale Albert Ier, 19-21 octobre, 1995, dans *Scriptorium*, 50, 1996. 検討会

第 11 回 (COE 第 3 ユニット第 2 部会「比較史料論」との共催)

2004 年 7 月 10 日 (土)

九大文学部会議室

西村淳一「イスタフリー著『諸道と諸国の書』の研究

—10 世紀のアラビア語原文と 12 世紀のペルシア語訳文の比較を

もとに一」

小山啓子「16 世紀フランスにおける都市行政と渉外活動

—リヨンから宮廷への特使派遣をめぐる—」

第 12 回 (COE 第 3 ユニット第 2 部会「比較史料論」との共催)

2004 年 7 月 31 日 (土)

九大文学部会議室

シンポジウム「史料論の射程」

溝口孝司「物質文化論としての資料論 —考古学的立場から—」

永島広記「日本統治期の朝鮮における「史学」と「史料」の創出」

加納 修「カピトゥラリアと国王証書

—フランク時代の国王命令と文書類型—」

舟橋倫子「文書史料集刊行とは何であったか

—アフリヘム修道院(ベルギー)中世文書の事例を通して—」

第 13 回

2004 年 9 月 4 日 (土)

Les tendances actuelles de l'histoire du Moyen Age en France et en Allemagne,
Paris, 2003. 検討会

第 14 回 (COE「比較史料論」研究会と共催)

2005 年 1 月 5 日 (水)

九大箱崎文系キャンパス 文・教育・人環研究棟 共同演習室

ジャン＝ピエール・ドゥヴロワ (ブリュッセル自由大学教授)

「西欧中世初期の経済と社会—史料の動態的解読、社会の動態的理解—」

第 15 回

2005 年 2 月 5 日 (土)

杉浦武仁「クール司教テッロの寄進文書(765 年)再検討」

岡崎敦 「『アーカイヴズ比較史』科研と、ソウル・シンポジウム」

第 16 回

2005 年 3 月 5 日 (土)

松尾佳代子「12 世紀サン・シプリアン修道院におけるカルチュレール編纂」

山田雅彦「北フランス都市文書館調査報告記

—サン・トメール市文書館所蔵の 13 世紀の都市カルチュレール—」

今年度、あらたに展開した研究会活動は、以下の通りである。

第 17 回（九州歴史科学研究会と共催）

2005 年 7 月 16 日（土）

西南学院大学学術研究所 大会議室

シンポジウム「史料論のいま」

岡崎敦 「総論・文字史料」

桃崎祐輔 「考古学史料」

西谷郁 「映像史料」

宮本なつき 「オーラル史料」

第 18 回

2005 年 7 月 17 日（日）

1. 岡崎敦「科研『西欧中世比較史料論研究』の狙いと活動予定」

2. シンポジウム「西欧中世史料論研究の具体的課題」

丹下栄 「中世初期」

岡崎敦 「中世盛期」

花田洋一郎「中世末期」

第 19 回

2005 年 9 月 10 日（土）

共通テーマ「修道院カルチュレール史料論」

藤本太美子「サン＝テチエンヌ修道院カルチュレール（12-13 世紀）の構成」

松尾佳代子「サン・シプリアン修道院に関する史料調査報告」

舟橋倫子 「アフリヘム修道院と 16 冊のカルチュレール」

第 20 回

2005 年 9 月 11 日（日）

「国際ラテン古書体学会研究会」集会録検討会

Le statut du scripteur au Moyen Age. Actes du XIIIe colloque scientifique du Comité international de paléographie latine (Cluny, 17-20 juillet, 1998), Paris, 2000.

第 21 回

2005 年 10 月 1 日（土）

共通テーマ「西欧中世史料論研究と日本学界」

丹下栄 「中世初期研究における「史料論的」研究の動向」

大宅明美 「フランス・ベルギー中世都市史研究をめぐる日本での史料論」

城戸照子 「日本における中世イタリア史研究動向」

森貴子 「日本学界におけるイギリス中世史料論研究の動向

—中世初期・盛期を中心に—

古城真由美「日本における学界動向 —中世後期イングランド—」

第 22 回

2005 年 10 月 2 日（日）

共通テーマ「考古学と歴史学」

森本芳樹「中世初期農村史における歴史学と考古学」

堀越宏一「フランスの中世考古学の現況」

第 23 回（アーカイヴズ比較史科研共催）

2005 年 11 月 20 日（日）

国立歴史民俗博物館

「トック（リル第 3 大学教授）連続講演研究会」

ブノワ＝ミシェル・トック「西欧中近世におけるアーカイヴズ」

第 24 回

2005 年 11 月 22 日（火）

中央大学後楽園キャンパス 新 3 号館 31101 教室

「トック（リル第 3 大学教授）連続講演研究会」

ブノワ＝ミシェル・トック「10-13 世紀の西欧における私文書について」

第 25 回

2005 年 11 月 26 日（土）

「トック（リル第 3 大学教授）連続講演研究会」中央大学と同じ

第 26 回

2005 年 11 月 27 日（日）

「トック（リル第 3 大学教授）連続講演研究会」国立歴史民俗博物館と同じ

第 27 回

2006 年 3 月 4 日（土）

共通テーマ「説教史料論の最前線」

赤江雄一「ラテン語で説教を書き、俗語で説教を行う説教者の心性

— 範例説教集と説教術書の分析から —」

大黒俊二「15 世紀トスカーナの俗人筆録説教 — 声と文字の弁証法 —」

第 28 回

2006 年 3 月 5 日（日）10 時 30 分から

「世界の史料論関係ホームページ」検討会

森貴子、赤江雄一、梅津教孝、城戸照子、岡崎敦